科目区分；小学校教科科目
授業科目名：初等図画工作

子どもになり、アートを楽しむことから始めよう

美術教育講座・杉林英彦

1. 授業概要

本授業は、学校教育教員養成課程及び特別支援教育教員養成課程において、小学校教科科目の選択科目の一つとして開設されている。受講登録者数は、63 名（学校教育教員養成課程・国語教育専修 2 回生 10 名、社会科教育専修 2 回生 10 名、数学教育専修 2 回生 6 名・3 回生 2 名、理科教育専修 2 回生 1 名・3 回生 5 名、音楽教育専修 2 回生 4 名・4 回生 1 名、美術教育専修 2 回生 6 名、技術教育専修 2 回生 5 名、家庭教育専修 2 回生 3 名、4 回生 1 名、英語教育専修 2 回生 5 名、4 回生 2 名、芸術文化課程造形芸術コース 2 回生 1 名、音楽文化コース 4 回生 1 名）、そのうち男性が 29 名、女性が 34 名である。しかし、継続的な受講をしているのは 55 名程度である。

本授業の目的は、小学校図画工作科の「表現」「鑑賞」領域に関わる教材を制作し，学習指導に必要な基礎的な知識と造形力を育成し，用具・道具の使い方を習得するである。また、到達目標としては、①造形に関わる基礎的な表現力や知識を身に付けること、②作品を鑑賞する方法を習得し，分かりやすく解説できることとしている。

授業の内容は、「造形あそび」を各回の内容に取り入れ、造形的な遊びから造形活動（描画表現、立体表現、平面表現、工作）・鑑賞学習へ展開することを意識した内容としている。授業者が各回の具体的な授業内容や展開を考える時に、重視していることは、受講者が「子どもになること」である。題材への興味・関心、造形活動での発見や驚き、友達と活動を共有することの楽しさを彼らが素直に表情や言動に表せるような環境に配慮した。また、各回で題材が完結するように、題材設定や、授業の準備に多くの時間を要した。

受講生への評価については、受講者が各回の授業内容などを記入した「活動シート」をファイリングしたポートフォリオを主な評価対象としている。また授業初回において、受講者へは、欠席や遅刻を減点対象とすることを提示している。

本受講者の多くが次年度前期に開講する初等図画工作科教育法を受講することになる（ある専修においては、カリキュラム上の問題で3年次で本授業を受講すること場合もある）。このことを考慮し、授業者は、本時においては受講者が実際に造形活動を行うことを通して、前述した目的を達成することとし、初等図画工作科教育法では、本時での造形活動（学習）を踏まえ、理論的学習を行うという繋がりを持たせている。

2. 授業公開の概要

2008年12月19日にFD活動の一環として授業公開を行った。本時は2008年最後の初等図画工作の授業であったことや、翌週にクリスマスをひかえている日程であったことを考慮して、「灯り」をテーマとした題材を行った。本時までにおいて、受講者は、描画表現、平面表現、針金や粘土による立体表現を行ってきた。授業者としては、工作の造形活動を行っていく準備段階として、「灯り」を扱うオリジナル蝋燭づくりとして本題材を設定した。

本時の目標は、以下の 3 つである。①絵本や身近な生活環境からオリジナル蝋燭づくりに興味をもつことができる。②蝋燭の制作手順を理解し、安全な環境を保ち制作することができる。③自作した蝋燭に愛着をもち、友だちに伝えることができる。また友だちの作品のよさなどを積極的に聞くことができる。以上の目標の設定にあたり、授業者は、受講者に「子どものように」活動することを求めた。それは、教育実習を未経験である受講者に、「教師」として視点を強要することよりも、彼らが「子どものように」題材に興味をもち、造形活動を楽しむことから、「私が子どもだったら」「こうした方がいいのに」という指導者としての視点を少しずつ身につけさせたいからである。

本時の内容については、ただ単に「蝋燭づくり」を行うのではなく、受講者各自が「想い」を意識した「灯り」を制作するための教材として「蝋燭」

を扱う内容を展開した。つまり、受講者が「想い」を抱くことを重視した工作の活動である。

具体的な展開は、まず6人程度の班をつくり、机をあわせ、新聞紙でその机を覆うように指示する。本時で使用する道具や材料を示し、各班で準備するように指示する。受講者が準備している間、授業者は各班に電源がいくように配備する。

その後、受講者に本時で何を行うのか、本時で行うことの意味などを、授業者がどのような経緯で題材設定をおこなったのかを交えて説明する。受講者は、はじめて経験する「蝋燭づくり」に興味・関心を示し、はやく制作したい表情をみせる。授業者は、蝋燭の「灯り」に彼らを着目させるために絵本『ろうそく　いっぽん』(作:市井みか、小峰書店、2008年）をスクリーンで提示する。遅刻してきた二人の受講者にそれぞれ2回ずつ、ゆっくり朗読させる。その絵本では、大切な蝋燭の「灯り」が描かれている。受講者に各自が想う大切な「灯り」を頭の中で思い描かせる。その後、17世紀フランスの古典主義画家であるジョルジュ・ド・ラ・トゥール（Georges de La Tour, 1593-1652）が描いた幾つかの作品をスクリーンに映す。彼の作品に描かれる蝋燭の「灯り」は、暗闇とのコントラストのなかで美しく表され、あたたかさや神秘性を感じさせる。受講者はこれらの例示で蝋燭の「灯り」を少しずつ特別なものとして考えるようになる。

そして、ようやく蝋燭の制作手順を記したプリントを配付し説明を行う。留意したのは簡単に制作できること、安全に制作する上で気をつけること、各自の「想い」を大切にすることである。制作がはじまり、彼らは少し緊張した表情で蝋を溶かしていく。授業者は机間支援で安全への配慮の仕方や、蝋を溶かしながら作業する手順などの説明を行う。面白い色づかいや工夫をしている受講者の作品を、タイミングをみて全体に紹介することも行う。

授業者が予想したよりも、作業時間が短く受講者全員が2個の蝋燭をつくることはできなかったが、最低一つの「想い」のこもったであろう蝋燭を制作することができた。受講生には、蝋燭を持ち帰ること、活動シートへの活動内容などの記載と、火を灯す前の蝋燭の写真と火を灯している蝋燭の写真の計2枚をシートに添付することを指示し、簡単な片付けを行い本授業は終了した。

3. 公開授業のカンファレンス

本公開授業には、美術教育講座より2名、家政教育講座より2名の教員の参加があった。本授業に関するカンファレンスは、授業終了後に行い、美術教育講座より2名、家政教育講座より1名の教員と授業者の計4名で行った。

本授業の自評としては以下のようである。a.授業前の該当教室でサークルなどの集まりがあり、事前の準備が十分にできなかったこともあるが、授業開始までの段取りの悪さは反省点である。b.教材研究時よりも、蝋を溶かす時間を要したこと。c.導入部分があいまいであったこと。

参加者した教員からの意見・質問としては、主に以下のようなものがあった。①導入部分がやや早口で聞き取りにくい。②材料費などは徴収しているのか。③受講者は造形活動を楽しく行うだけのようにも感じられた。教員養成課程の学生を対象としている授業として、どのように考えているのか。④ティーチング・アシスタントに入ってもらうことによって、授業者の負担も軽減され、受講者への視野も保たれるのではないか。⑤事前準備も含めて労力のいる作業をしている。⑥評価に関してはどのように行うのか。ポートフォリオ用のファイルまで用意する必要はあるのか。

上記①から⑥までの意見・質問への返答は次のようである。①については、本授業にかかわらず授業者自身でも感じていることである。改善に向けて取り組みたい。②については、授業初回時に示したシラバスでは徴収する可能性は言及しているが、本授業に関しては徴収しない方向で考えている。③については、本授業では受講者が将来子どもと接し、図画工作科として支援を行っていくためには、彼らの感性を子どもに戻し、アートを楽しむことが基本だと考えていると述べた。また、受講者は、子どもとしてアートを楽しむ活動の中であるからこそ、教師として支援する方法や技術を主体的に獲得していくができることを説明した。授業者としては、以上のことを意識した中で授業を構成している。④については、授業者としても、教材研究などからティーチング・アシスタントとできれば、双方に有益なことだと考えている。今後実施できるように考えたい。⑤時間と労力と費用がかかるので大変だが、授業者としては一番楽しい時間であると答えた。⑥受講生にファイルを用意させたことがあったが、形式がバラバラで紛失も多く、管理が困難であった。大人数をポートフォリオによる評価で行うのであれば、こちらで管理した方が逆に負担が減る。

上記以外にも多くの意見があり、改善策なども協議することができた。公開授業を通して、客観的に自身の指導法や指導内容を捉え直すことができたと考えている。